

「浙江大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科1年 (氏名) 歳森雄太

私がこのプログラムで感じたことは、現地の留学生の中国語の技術が自分の技術に比べてはるかに優れていたということだ。彼らと自分でなぜここまで差が生じるのか、その理由は容易に理解できた。彼らは数か月間、あるいは数年間という長い期間中国に過ごしている。そのため授業や生活などあらゆる場面で中国語を使う。これに対し私たちは、中国語の授業でさえも日本語で行われることがほとんどで、またネイティブの人々の会話に触れる機会も非常に少ない。したがって私は特にリスニングやスピーキングの能力が欠如していた。中国人の先生の授業も全く理解できないときがあり、そして自分の言いたいことを上手に表現できなかった。こうした「できない」という経験は、実際に中国に行ってみなければ分からないことであっただろう。

ところが、先生や留学生と接するうちに、次第にそうした能力も少しずつ上昇したと感じた。最初は何もできずに戸惑っていたが、次第に食堂での注文もスムーズに行われるようになり、他の留学生と中国語を交えて会話できるようになった。こうしたステップアップや達成感は、このプログラムによって与えられたものであろうと私は考えた。また、向上したのは中国語だけではない。どうしても中国語が理解できなかった時、私は主に英語に頼らなければならなかった。そして、留学生の会話もほとんどが英語だった。そのため、私は英語でコミュニケーションを図る機会が多くなり、英語の力が伸びたように感じた。英語は国際交流において必要不可欠な言語であるため、このような体験は将来非常に役立つものになるだろう。

正直私は、中国に対して悪い偏見を抱いていた。その中の一つは、中国は不衛生な国だということである。日本でも中国産の食品について頻繁に報道されているので、そのような印象が根付いてしまったのだ。しかし、今回訪れた浙江大学及び杭州ではそのようなイメージは一切見られなかった。路上にゴミが散らかっていることはなく、スーパーマーケットの食材や水はおいしかった。食中毒や腹痛で苦しむような経験は全くなかった。私はこのプログラムを通して、中国に対して抱いていた根拠のない思い込みや偏見が取り去られたように感じた。既成の価値観とは違った、新たな視点を私に与えてくれたように思われた。

私はこのプログラムに参加してみて、自分の中国語のことや、中国という国そのものについて、多くの事柄に「気づく」ことができた。それは本やインターネットでは発見できない生の経験であった。特に中国語については、より中国語を学習したいという意欲をわき立たせた。そして何より中国での生活は非常に有意義で楽しかった。そのためそのような「気づき」や「楽しみ」に出会った後、また機会があればもう一度留学してみたいという思いも芽生えた。今回のプログラムは、そのような「気づき」や「楽しみ」のきっかけであるように私には感じられた。